

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座三の十三の四真光ビル  
電話 (五四二) 九一五五番

清元協会

港区南青山二の九の五  
電話 (四〇二) 〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三 新橋会館  
電話 (五七二) 〇二一六番

常磐津協会

港区南麻布五の三の四十六  
電話 (四四四) 三〇二〇番

長唄協会

中央区銀座八の十一の九  
電話 (五七二) 四九四五番

社団法人 日本三曲協会

文京区白山五の二十六の十二  
電話 (九四二) 二三七六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和四十八年二月四日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演

第二部 四時半開演 八時終演

'73 都民芸術フェスティバル

第三回 邦楽演奏会

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。この会も回を重ねまして、ごらんの通り三回目の演奏会を開催することができました。御協力下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。

このようにして、邦楽が自主的に集まって演奏会を開くということは、今までにあまり例がありませんでした。これからは、この催しを土台にして、邦楽について考えたり、話し合ったりして、よりよい明日の邦楽のために努力して参りたいと思います。

ですから、今日おき下さいました御意見や御感想などを、どうぞお寄せ下さいますようお願い申し上げます。何かと不行届の点もありますが、お許しを願ひまして、どうぞ御ゆっくりとお楽しみ下さいますよう、御願ひ申し上げます。

第三回邦楽演奏会によせて

東京都知事 美濃部 亮吉



東京のよごれた空気と水と土と緑の中で、いま、私たち都民は、心から平和な生活をもとめています。

どこかの国のできごと、たちまち、ほかの国のひとびとの生活に鋭く影響するという感じやすい世界の中で、都民のこのねがいは、同じ気持を持つ世界のひとびとと共感し、連帯しています。

平和な市民生活をもとめる、ということ、人間としてあたりまえのねがいです。しかし、このあたりまえのねがいが、いまほど実現しにくい時代はないことも事実です。

その障害の壁を越えて、このねがいの実現に挑戦して行く都民にとって、何よりも必要なのは心の糧であり、活力です。

「すぐれた芸術を、やすい料金で」

という東京都のねがいに共鳴して、ことしも多くの芸術家や文化団体がそのねがいを実現してくれました。

この邦楽演奏会もそのひとつで、昨年にひきつづいて、日本の伝統音楽が一堂に会して、よい音楽を鑑賞していただく催しであります。

どうか、多くの都民のみなさんが心からのしんでくださることをおねがいたします。



第一部番組（十二時半開演）

一、長唄柳 糸引 御 撰（操三番叟）

同	同	同	同	唄
杵	芳	芳	杵	杵
屋	村	村	屋	屋
栄	伊	伊	栄	栄
美	登	十	美	香
勝	静	富	勝	

同	同	同	同	三味線
杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋
栄	栄	栄	栄	恵
美	き	禧	初	津
初	ぬ		子	子

二、清元道行故郷の陽雨（梅川）

同	同	同	浄瑠璃
清	清	清	清
元	元	元	元
成	梅	政	登
美	喜	栄	志
太	太	太	寿
夫	夫	夫	太

上	同	三
調	調	味
子	子	線
清	清	清
元	元	元
吉	松	邦
寿	之	寿
郎	助	

三、三曲 秋 篠 寺

堀内瑞善 作歌  
中田博之 作曲

尺	唄	中
八	高	田
	野	博
	和	之
	之	

四、宮 籬 鳥 辺 山

同	同	浄瑠璃
宮	宮	宮
籬	籬	籬
千	千	千
祐	伎	芳
三	江	

同	三
宮	味
籬	線
千	宮
咲	籬
	千
	愛

五、三曲越 後 獅子

三絃替手

阿部桂子  
藤井久仁江  
朝岡晃世  
菊地千惠子  
柴田房子  
柴田清子

三絃本手

太田里枝子  
小林玉枝子  
矢木敬二  
川瀬白秋  
太田久子  
土岐龍里  
齊藤喜野  
安藤惠美  
船山英世  
社本久子  
三木公子  
堀内紀子  
栗山五百子  
山本照代  
堀内  
間瀬洋子

尺八

川瀬順輔  
川瀬勤輔  
高橋鉄観

六、常磐津 忍 夜 恋 曲 者 (将門)

浄瑠璃 常磐津千東勢太夫  
同 常磐津 宮尾太夫  
同 常磐津 千代太夫  
同 常磐津 初勢太夫

三味線 常磐津 文字兵衛  
同 常磐津 文字助  
上調子 常磐津 八百二

七、義太夫 壺坂 寺の段

三十三所花ノ山

沢市竹本 土佐廣  
お里竹本 越道  
観世音 竹本 土佐菊  
三味線 豊澤 猿公  
ツレ 豊澤 津賀昇  
彈 豊澤 公佳

第二部番組 (四時半開演)

大野惠造 作詞  
宮城道雄 作曲

一、三曲 昭 和 松 竹 梅

第二筆

小橋幹子  
萩原五十鈴  
木藤きみ子  
松本ゆき子  
塚越清子  
田辺宮子  
山田三子  
藤田節子  
山口永子

第一筆

宮城喜代子  
宮城數江  
英惠美子  
新谷美年子  
久保美子  
内田克子  
菊地悌二  
戸山勝恵  
上木康江

二、常磐津 釣

女

浄瑠璃

常磐津 文字太夫  
同 常磐津 須磨太夫  
同 常磐津 小文太夫  
同 常磐津 八重太夫

三味線

常磐津 菊三郎  
同 常磐津 菊寿郎  
上調子 菊雄

三、河東 泰 平 住 吉 踊

浄瑠璃

山彦節子  
同 山彦綾子  
同 山彦ひな子  
同 山彦美枝子  
同 山彦祐子

三味線

山彦河良  
同 山彦莊子  
同 山彦照子  
上調子 山彦貞子

四、三曲 鶴 壽 千 歳

今井慶松 作曲

三絃

山勢 司都子  
佐藤 俊勢  
塚田 秀勢

箏

山勢 松韻  
曾我部 知勢  
持田 耿勢  
阿部 睦勢  
近藤 千勢  
小島 染井  
笠川 井登江  
三杉 幾更井  
石波 千賀井  
野崎 景梁

箏

五、清元 日月星 昼夜織分(流星)

浄瑠璃

清元 美月太夫  
清元 菊栄太夫  
清元 志佐太夫

三味線

清元 一寿郎  
清元 国次郎  
上調子 美治郎

六、義太夫 道行 旅路の嫁入(八段目)

仮名手本忠臣蔵

浄瑠璃

竹本 喜久太夫  
竹本 彌乃太夫  
竹本 綾太夫

三味線

野澤 吉平  
豊澤 松三郎  
豊澤 松七

七、長唄 外記 節石 橋

唄

杵屋 六左衛門  
杵屋 喜三郎  
杵屋 六七郎  
同 六美朗

三味線

杵屋 六一郎  
杵屋 勘五郎  
同 六寅司  
上調子 六郎助

囃子

福原 由次郎  
梅屋 金太郎  
同 右近  
大鞆 勝之丞  
太鼓 福太郎

# 歌詞と解説 (演奏順)

## 第一部

### 一、長唄柳糸引御撰 (操三番叟)

嘉永六年(一八五三)二月、江戸河原崎座で、大阪から来た嵐瑠瑠という俳優が演じたのが最初です。篠田瑠助作詞、五世杵屋弥十郎作曲。  
三番叟は長唄にもほかにありますが、この曲はそれまでとちがって、人形から思いついて操りとしたところに、特色と面白さがあります。初芝居気分のみちたはなやかな曲で、曲想も変化していますので、現在のお芝居でももつともよく演奏されます。今回の演奏会の幕明きにふさわしい名曲と申せましょう。

二上りへ天照らす春の日影も豊かにて合さす手引く手の一さは、むかしを今に式三番、ありし姿をかかり衣に、竹田が作の出立栄え合へとうとうたりたりら、たたりあがり、ららりどうへ千代のはじめの初芝居、相河原崎賑わしく合人の山なす蓬菜に、鶴の羽重ね亀の尾の、長き栄えを合三ツの朝、幸い心にまかせたりへ鳴るは滝の水、鳴るは滝の水合なるといふのはよい辻占よ、天津乙女の合さまがもと合絶えずとうたり、

へ落人の合ためかや今は若草の合すき尾花はなけれど、世を合忍ぶ身の後やさき合へ人目をつつむ類かむり合かくせど色香梅川が、馴れぬ旅路を合忠兵衛が合温められつ温めつへ石原道をはかどらぬへ身の練り言は愚痴なれど合大恩うけし養子親合御苦労かけしその上に合明日の歎きの数々は、解くに解かれぬ三度荷の合重き不孝の罪科と、かこち涙に目も潤むへ顔つれへとうちまもり合それのようにいわんす程、この梅川が身のつらさ合へ惚れた女子のせうがいは、仇な勤めを実にして合末は女夫といひ交し合今の愛き難儀合堪忍してとばかりにて、後は涙の村時雨。へのべのみづをりしおるにも合急げば早き故郷の、新口村にぞ合着きにけり。

忠兵衛へコレこ、はわしが生れ在所、四五丁行けば実の親、孫右衛門様の所なれど、今の身の上をお目にかけるは大きな不孝、この藁葺は忠三郎というて親達の家来同然、しばし身の上を頼んで見ん。

梅川へそんならこ、がお前の在所新口村でござんすかえ、人目いとうて来たなれど、ほんに思えば、へ大阪を立ち退いても、私が姿目になてば、借り駕籠に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日と夜を明かし、二十日あまりに四十両、使い果して二分残る、金故大事な忠兵衛さん、科人にしたも私から、さぞ憎からうお腹も立とが、因果つくじやと諦めて、お許しなされて下さりませ。

梅川へよしな私故お前に心遣いさせますと、思えばひよつと愛想もつきようかと、そればかりが悲しうござんす、そうしてこ、は剣の中こうして居ても大事ござんせぬかえ。

忠兵衛へイヤ、男気な忠三郎、頼んで今宵はこ、に泊り、死ぬるとも故郷の土。へ生みの母の墓所へ一緒にうづもれ嫁合姑の未来の対面させたいと、目もうろく、と泣きければへそれは嬉しうござんしよう、さりながら合私のはんの母さんは、京の六条珠数屋町、一目逢うて死にたいと、またも涙にむせびいる。

忠兵衛へオ、道理じゃ、恩のある養子親妙閑様や許婚のおすわへも不埒の託、オ、アレ、あれへお見えなさるは親父様、この世のお別れ、よそながらのお暇乞い。  
梅川へそんならあの緞子の肩衣を着てござんすが、お前の父さんでこ

絶えずとうのが誠なら、日は照るとも、濡るる身に合着つつ馴れにし羽衣の、松の十返り合百千鳥、絶えずとうたりありうどう。本調子へその恋草は千早振る合神のひこさの昔より、つきぬ渚のいさご路や、落ち来る滝の合末かけて、結ぶ妹背のよい仲間志に、わが敷島のやまと唄へ天下泰平。国土安穩、今日の御祈禱なり。三下りへおさえおさえ喜びありや、わがこの所より外へはやらじとぞ思うへ天の岩戸を合今日ぞ開けるこの初舞台、千代万代も合花のお江戸の合とつばひとえに合お取り立て、おこがましくも御目見得に、ほんに鶴のまね鳥飛び合へ難波江の岸の姫松葉も繁り、ここにいくとせ住吉の合神の恵みのあるならば、君に扇の御田植、逢うとは嬉し言の葉も、涙の真砂の数々に、読むともつきぬ年波や合へなじよの翁は仇つき者よ、つい袖引いて合驛かんせ合おもうも千歳仲人して、水も渡らさぬ中々は、深い縁じやないかいな合おもしろやへ相生のまつ夜の首尾に逢うの松合ほんに心の武隈も、岩代松や曾根の松、あがりし闇の睦言に合濡れて色増す辛崎の、松の姿の若みどりへ千秋万歳万々歳、五風十雨もおだやかに、恵みを願う種時と合方謡い奏でて祝しける。

### 二、清元道行故郷の陽雨 (梅川)

文政七年(一八二四)三月、江戸市村座初演。義太夫節の「けいせい恋飛脚」新口村の段の詞章を、そのまま借りたもの。江戸の人にわかりやすくするため清元にしたもので、初世清元齋兵衛作曲。

故郷の新口村へ落ちてきた梅川と忠兵衛が、忠兵衛の実の父親孫右衛門と対面するという場面で、お芝居でもよく知られておられます。  
へ二十日あまりに四十両、使い果して二分残る」とか、へ京の六条珠数屋町」などは、一種の流行語のようになっておりました。

ざんすかえ、ほんに親子とて争われぬもの、目元なら口元ならお前によく似た事わいなア  
忠兵衛へサそのようにう似た親と子が、言葉さえ交されぬは何としたこの身の因果  
梅川へほんに今がお顔の見初めの見納め、モシ私や嫁の梅川でござんすわいなア  
合へあなたへ御苦労かけますもみんな私故この梅川故  
忠兵衛へア、コレ人目にかゝらばたがいの身の上、少しも早う  
梅川へそれじやというてこれがこの世の  
忠兵衛へエ、未練なこと  
へ平沙のうたう血の涙、永き親子の別れには、安方ならで安からぬ、心残して別れ行く。  
兩人へおさらば。  
へ心残して別れ行く。

### 三、三曲秋篠寺

堀内瑞善 作曲  
中田博之 作詞  
奈良の西大寺の傍にある秋篠寺の仏像「伎芸天女」を押し、その尊嚴の氣にうたれた中田博之師が、その感激を作曲(昭和四十五年)したもので、歌詞は同寺前住職堀内瑞善師作の讃歌の中から、和歌六首を選んで作ったものです。序から四季と結びの六首を、平調子組曲形式に、各章は何れも六十四拍子でまとめてあります。これはその仏像の風格の尊嚴に對し、筆も古典の格式で、組曲の型にはめて仕上げたもの由です。

序 除夜の鐘 ひびきてゆらぐ蟻の灯に  
伎芸天女の 裳裾もゆらぐ  
春 山桜 けふをかざりと散りしきて  
春雨けむる 寺となりけり

夏 ざわくと 雀らかえり静もりぬ  
梅雨の陽おつる 杉の木ぞ多に  
あるかなきまでに 澄みたる關伽の井に  
秋 かそけく紅葉 ひと葉うきたる  
冬の陽を うけしみ堂のまえにして  
常寂光土と しばしやすらふ  
人の世の 美しかれと み仏は  
地に現れますか 伎芸天女と

#### 四、宮 蘭 鳥 辺 山

京都市郊外、東山の中腹付近の鳥辺山または鳥辺野というあたりは、男女の心中道行にふさわしい場所として有名でした。  
それでこの鳥辺山を舞台にした事件は、古くはおまん源五兵衛、お染半九郎などで知られていましたが、明和四年（一七六七）ごろ、宮蘭節に作曲され、集大成されました。  
この曲は、宮蘭節の代表曲で、幽玄な中にも妖しいばかりのなまめかしさを漂わせております。  
なお、お芝居でよく上演される「鳥辺山心中」は、大正四年に岡本綺堂がこれらの実説やいつたえをもとに創作したものです。

一人来て、二人連れ立つ極楽の、清水寺の鐘の聲、はや初夜もすぎ、四つも告げ、九つ心も、恋路の闇にくれは鳥、あやなき空や、浮橋に、つながら縁や縫之助、つい仇惚れも誠となりて、ほんの女夫になりたいたと、思う思いはまならぬ、今はこの身に愛想もこそ、二上りへ尽きた浮世や、いざ鳥辺野の、女肌には白無垢や、上に紫藤の紋、中着緋紗綾に黒繩子の帯、年は十七初花の、雨にこがるる立ち姿、男も肌は白小袖にて、黒き輪子に色浅黄裏、二十一期の色盛りをば、恋という字に身

後獅子」、それを幕末の江戸芝居で中村歌右衛門が踊る七変化の一つとして作ったのが、八代目杵屋六左衛門、それがずっと華やかにできていて、終りのさらしの手などで評判が高くなったのだが、その元曲は地唄の「越後獅子」、その源流の曲として地唄の味を鑑賞するものとなっております。

へ越路がた、お国名物さま、なれど、田舎なまりの片言まじり、白うさぎなる言の葉に、面白がられしその事、直江浦の海人の子が、七つか八つ目鱈まで、住むやあみその綱手とは、恋の心も米山の、とうき浮気で黄蓮も、なに糸魚川糸魚の、縫れもつる草浦の、油漆とまじわりて、末松山の白布の、縮みは肌のどこやらが、見えなく国の風流を、うつし太鼓や笛の音に、弾いて唄うや獅子の曲。向かい小山のしちく竹枝節揃えて、切りを細かに十七が、室の小口に昼寝して、花の盛りを夢に見て候。（手事）夢のうらかた、越後の獅子は、牡丹は持たねど富貴は己が、姿に咲かせ舞い納む、姿に咲かせて舞い納む。

#### 六、常 磐 津 忍 夜 恋 曲 者（将 門）

天保七年（一八三六）七月、江戸市村座初演。宝田寿助作詞、四世岸沢式佐作曲。

山東京伝の小説を脚色した狂言の一部で、将門山の古御所に住む妖怪をたしかめるため、君命をうけた大宅太郎光国が忍び込むと、将門の娘瀧夜叉姫が傾城如月となってあらわれ、色仕掛で味方にしようとしてします。光国はわざと心を許し、將軍最後の軍物語をすると、如月がくやしがるので、本性を見破られ、錦の旗を落すので素性がばれ、ついに本名を名乗って妖術で渡り合うという筋です。  
なかでも瀧夜叉姫のクドキへ嵯峨やお室の花盛り」は、大へんよく知られていまして、ときわすの代名詞のようになっております。

を捨舟、どこへ取りつく、島とても無し。本調子へきく度々につらかりし、父母の事思い出し、あとの嘆きを思いやり、ここから去んで呉竹の、伏し沈みたる袖の露、へ浮橋涙もろともに、父さんや母さんの、あるはお前も同じ事、その親々に苦をかける、不孝者には誰がした、合惚れという仲人や、枕の咎じやないかいな、恋は心の外とやら、夕べも内の花車さんが、わしに意見を真実の、色という字があればこそ、好かぬ勤めの辛抱も、好いた殿御へ心意気、いとし可愛が定ならば、五度逢うものを三度逢い、二度を一度の逢瀬には、親おやかたの機嫌もよく、色で身をうつこともなく、世間に多い心中も、金と不孝で名を流す、色で死ぬるは無いぞとよ。恋は思いのはじめにて、盛りが憎い迎い駕籠。そのきぬぎぬや朝顔の、夕顔にまでわけへだて、辛気な苦界まならぬ、悲しいことや辛いこと、生きる死ぬるの手詰にも、必ずかならず若氣を出し、短気な心持ちやんなやと、重ね井筒の上越した、粹な意見も上の空、お前に迷う心から、面白い気で聞いていた、親御様へも世の義理も、わしから起るのしだら、堪忍してとばかりにて、すがり付いて泣きいたり。二上りへ思い切らしやられ、もう泣かしやんな、わしは泣かねどソレこなさんの、いやそなたの、いやそなたのと、顔と顔を見合わせて、一度にわつと嘆くにぞ、一足ずつに消えて行く、終にこの野の春降る雪や、折からにはや寺々の鐘も撞きやみ、夜はしらじらと、鳥辺山にそ着きにける。

#### 五、三 曲 越 後 獅 子

津山検校 作曲

「越後獅子」といえば、現在ではすぐ長唄のもののように思いますが、実はこの長唄の「越後獅子」は地唄から出たものです。古くは越後から角兵衛獅子が旅に出て、大阪あたりでも、太鼓の音につれて、獅子頭を冠った子供が、タツケ袴で店頭でひっくり返って芸当をする。その歌も越後の名物を並べるといのが縁にまわる。これを地唄に作ったのが「雪」や「残月」で有名な峰崎勾当の作曲でハヤった「越

へそれ五行子にありという、かの紹興の十四年、楽平泉なる陽泉の、むかしをここに湖の、水気盛んに浩々と、澄めるは昇る天津空、雨もしきりと古御所に、解語の花の立ち姿。三下りへ恋は曲者世の人の、迷いの淵瀬きのどくの、山より落つる流れの身、うき音の琴のそれならで、へ妻呼び交す雁金の、その玉章をかくばかり、色に手だれの傾城も、こがるる人に逢い見ての、のちの思いにくらぶ山、忍ぶ涙の春雨を、傘にしのいで来りける。へ大宅の太郎は目をさまし、将門山の古御所に、妖怪変化すみか求め、人倫を悩ます由、頼宣公の仰せをうけし光国が、しばしまどろむそのうちに、見馴れぬ座敷のこのていは、正しく変化の所為なるか。へ申し光国様。へさてこそ変化ござんなれ、イデ正体をと立ち寄る光国。女はあわて押しとどめ、へアア申し、様子いわねばお前の疑い、私や都の島原で、如月という傾城でござんすわいなア。へアア心得難きその一言、波濤を隔てしこの国へ、傾城遊女の身をもつて、来り住むべきいわれなし。よしまた都の遊女にせよ、ついに見もせぬその方が、何故われをと不審の言葉。へアアお尋ねなくともお前の胸暗らすは過ぎし春の頃、へ何と。へ申し。クドキへ嵯峨や御室の花盛り、浮気な蝶も色かせぐ、廓の者に連れられて、外珍らしき嵐山、へソレ覚えてか君様の、袴も春の朧染め、朧気ならぬ殿振り、へ見染めてそめて恥かしの、森の下露思いは胸に、へ光国様ということは、その折知つて明け暮れに、女子の念が今日の今、届いて嬉しいこの逢瀬、疑い晴らして下さんせ、やいのくとりすがり、赤らむ顔の袖屏風。光国わざと打ちつけて、へいかさま切なるおことが心底、さほどに思う愛情を捨つるはかえって本意ならず、疑念はさっぱり晴れたれども、武辺修業のわが身の上、望みを果たさばとも角も、それにつけてもいにしえの、東内裏の莊嚴を、思い出だせば方々それよ。へさても相馬の将門は、へ威勢のあまり謀叛とともに、企て並べし大内裏、驕奢のふるまい都にきこえ、朝敵討手の三大将、頃は二月の百千鳥、まっさきかけて押し寄むろくぱつと吹き散つたり。平親王が最後の戦、見よや見よやと夕月の、鹿毛なる胸にうち乗って、向う者をば拝み打ち、立ち割り、ほろ付け、車斬り、かくと見るより上平太が、放つ矢先に将門は、こめかみ篋深に射通され、馬よりどうとあえなき落命。寄せ手は勇むかちどきと、今見る如く物語る。へ思えば無念と如月が、齒をくいしる忍び泣き、さこそと光国詰り寄って、へ合点の行かぬ女が振る舞い、今合戦の様子



をきき、しきりに催す落涙は、と見とがめられてそらさぬ顔。ホ、ホ、ホ、。何の私が泣くものぞ。泣いたというは、オ、それそれ、可愛い男に別れの鐘、きぬぎぬ告ぐる朝雀、雀が鳴いたということいなア。ほのぼのと、雀さえずる奥座敷、灯火しめす男ども、へ扉風一重のそなたには、まだ睡言のきこゆれど、へわれは見たらぬ夢を裂き、はやきぬぎぬと引きしめる、去なば去なんせよしやただ、ひとり浮き身を数え唄、廓の尿管に紛らかす、はずみに落せし錦の御旗。へさてこそさてこそ、相馬錦のこの旗を、所持なすからは問うに及ばず、将門が忘れ形見、腫夜叉姫であろうが。へイヤ知らぬ、覚えはないぞ。へヤア覚えな。いと卑怯の一言、肉芝仙より伝わりし、蝦蟇の妖術習い覚え、この古御所に隠れすむこと、叡聞に達せし上は、もはや逃れぬおことが身の上本名なのって降参なせ。へチエ残念や、口惜しや。かくなる上は何をか包まん。まこと我こそ平親王将門が娘、腫夜叉なるわ。へさてこそなへ一器量ある汝ゆえ、命を助け味方にと、思う心が仇となり、見現わされし上からは、習い覚えし妖術にて、光圀そちが命を絶つ。覚悟なせ。へ何を小しやくな。へ怒れる面色たちまちに、柳眉逆立ちつく息は、炎となつて焰々たる、妖術魔術の業通に、さすがの勇者もたじたじ、梢木の葉のさらさらさら、魔風とともに光圀が、えりがみつつかんで宙宇の争い、怪し恐ろし世にうたう、時を絵本の忠義伝、歌舞伎に残す物語、拙き筆に書き納む。

### 七、義太夫壺坂寺の段

三十三所花の山

原作者未詳。二世豊沢田平、加古千賀(田平の妻)改作加筆。明治二十年二月、大阪稲荷彦六座初演。  
大和の国壺坂の里に住む盲目の座頭沢市は、世をひがみ、妻の真心をも疑うようになっていました。しかし美しい妻お里の愛情と信仰心にほだされ、妻と共に壺坂の観音堂に参籠することになります。

明治初期にできた名作で、盲人夫婦の哀歎、とくに女房お

え、わしが死ぬのがそなたへ返礼、生きながらえていづれへ成りと、よき縁付きをしてたも、や、や、や、ム、最前聞けば、アノ坂を登りて右へ行けば、幾何丈共しれぬ谷間との事、是究竟の最期所、かゝる霊地の土と成れば、未来は助かる事もあらん、ム、幸いに夜は更けたり、人なき中に、オ、そうじゃ、と立上り、乱るる心取り直し、上る段さえ四つ五つはや咄の鐘の聲、イザ最期時いそがんと、杖を力に盲目のさぐり、くつてようようと、こなたの、岩にかき上れば、いと物すまじき谷水の、流れの音もどろどろと、響くは弥陀の迎えぞと、杖をかたえに突立て、なむあみだ仏と諸共に、がばと飛込む身の果は哀れ成りける次第なり、かゝる事共露知らずいきせき道より女房が取つて返すも気はそぞろ、常に馴れにし山道も滑り落つやら、転ぶやら、漸々登る坂の上、ヤアコリヤコレこちの人が見えぬわいな、沢市様、くいのう、沢市様いのう、と尋ね廻れど声だにも、人かげさ見えざれば、あなたへうろうろこなたへ走り、沢市様のいのう、くいとこ、かしこ木の間をもる、月影にすかせば何か物有り、立ち寄り見れば覚えの杖、ハツト驚き遙かなる、谷を見れば照る月の、光に分かつ夫の死骸、ハアコリヤマアどうせう悲しやと、狂気の如く身をだえ、飛びおりにもつばさなく呼べどさけべどそのかきもこたうる物は山彦のこたまり外なかりける、エエこちの人聞こえませぬ、く、く、わいな、この年月のかん難も、いとわぬ私が辛抱はな、只一筋に観音様へ願込めて、どうぞ早う眼の明きます様、お助けなされて下されと、祈らぬ間迎もない物を、きょうに限つてこのしだら、後に残つて私しやまあどうなるぞいなア、どうしようぞいな、どうぞいなく、こんな事なら何のマア、お前を無理に連れて来ましよう、堪忍して下さんせ、く、く、ほんに思えばこの身程はかない物が有ろかいな、二世と契りしわが夫に長いわかれとなる事は、神ならぬ身の浅ましやかゝる憂目は前の世の、報いか罪かエエ情なや、この世も見えぬ盲目のやみより闇の死出のたび、誰が手引を任せてくれう、迷わしやるのを見る様で、いとしいわいのとかきくとき、くどき立く、歎く涙は壺坂の谷間の水や増るらん、ようよう涙の顔を上げアア悔やむまい歎くまい、皆なに事も前の世の、定まり事とあきらめて夫と共に死出の旅、いそくはかたみのこの杖を、渡すは此の世を去つてゆく、行先導き給えや南無阿弥陀仏の、声諸共に谷間へ、落ちてはかなき身の最期貞女の程こそ哀れなり頃は二月中空や、早明け近き雲間よりさつと輝く光明に連れて、聞こゆる音楽の音も妙なるその中に、

里の貞節の可憐さは、美しい節付と相まって人気を博し、今日もなお流行しております。

へたどり行く、伝え聞く壺坂の観音は人皇五十四代、桓武天皇奈良の都にまします時、御眼病甚しくこの壺坂の尊像へ、時の方丈道喜上人一百七日の御祈禱にて、たちまち平癒有らせられ今に至つて西国の、六番の札所とは皆人々の知る所、げに有りがたき靈地なり。  
へサア、沢市様、ソレ観音様へ来たはいな、ハアモウこが観音様か、ヤレ、有難や、ハア、なむあみだ仏、く、く、コレ、コレ、こちの人、今宵こそゆつくりと、御詠歌を夜もすがら、上げませうではあるまいかと、夫婦して、唱うる詠歌の声すみて、いとしく、と殊勝なる、岩を建て水をたたえて壺坂の、庭のいさごも浄土成らん、コレお里、叶わぬ事とは思え共、そなたの詞にしたこうて、来る事は来ても中に、この目は治りそうなことはないわいのう、エ、この人はいのう、又しても、そんな事、モとかく信心という物は、気を長う歩み運んで、心を鎮め一心に、お縋り申せば何事も、叶えてやるとのお慈悲じやわいのう、そんな事をいう手間で、早うお唱え申しましよと力を付ければいかさまのう、ほんに云やればそのとおり、そんならわしは今宵から、三日の間、こゝに断食する程に、そなたは早う内へいんで、なにかの用事仕まうておじゃ、治るとも、治らぬ共、此三日の間が運定め、オオ、オ、オ、オ、オ、オ、そんなら私も内へ帰り、何角の用事片付けて来ましよう、がコレ沢市様、このお山はけわしい山みち、殊に坂を登りて右へ行けば、幾何丈共しれぬ谷間じゃ程に、コレかんまえてどっこへもオ、どこへ行こうぞ、今夜から観音様と、首引きじや、アハ、ハ、ハ、ホ、ホ、ホ、と笑いながらに女房が跡に心は置く露の、散りてはかなき別れ共しらでどつかは急ぎゆく、跡に沢市只一人、こらえし胸のやるせなくかつぱと伏して、泣き居たる、コレ嬉しいぞや女房共、此の年月の介抱共の上に、貧苦にせまるもいとなく、只の一度も愛想つかさずあまつさえ、目かいの見えぬこの身をば、大事にかけてたもる志、それ共しらず色々疑立て、コレ堪忍してたも、今別れてはいつの世に、またあう事の有るべきか、ふびんの者やいじらしやと、大地にどうと身を打ち伏し前後、ふかくに歎きしが、ようように顔を上げ歎くまい、三年が間女房が、信心凝らして願うても、何の利益もない物を、いつまで生きても詮ないこの身、世の謬にもいう通り、退は長者が二人のたと

いとつけ高き上臈の姿を仮に観音、微妙の御声うるわしく、いかに沢市承われ、汝前世の業により盲目となつたり、しかも兩人ながら、今日にせまる命なれ共、妻の真心または、日頃念ずる功德にて、寿命を延ばし与うべし、この上はいよ、信心渴仰して、三十三所を順礼なし、仏恩報謝なし奉れ、コリヤお里、く、沢市、と宣う御声諸共に、かき消す如く失せ給え早、晨朝の鐘の声四方に、ひびきて明行く空、ほのぼののくらき谷間には、夢とも分かぬ二人共、むつくと起きて、ヤアこなたは沢市殿、アア、コレこちの人、お前の目が明いて有るがな、エエ、アノ、ほんにコリヤ眼が明いてある、オオ眼が明いた、く、く、く、眼が明いた、チエエ観音様のおかけ、有難うござります、く、有難うござります、く、わいのう、ムム、そしてアノ、お前はマアどなたじゃえ、どなたとは何ぞいの、コレ私はお前の女房じゃわいな、エエ、アノお前がわしの女房かえ、コレハシタリ、始めてお目にかゝります、アア嬉しや、それに付けてもふしぎな事、正しくわしは谷へ落ち、死んだと思つて何にも知らぬその内に、観音様がお出でなされ、前世の事、細々と御知らせ、サイナア、私もお前のお目を追ひ、谷へ落ちたに違ひはない、が身内に一つも疵付かず、その上お前のお眼は明く、ホ、コリヤマア夢ではないかいな、ムムそんなら今、沢市、とおつしやつたが、コリヤ観音様が直々にお呼生け下されましたに違ひない、ハ、ハ、ハア有難や忝けなや、これより直ぐにお礼参りは浮木の亀、始めて拝む日の光りは、年立ちかえる心地ぞや、是ぞ誠に観音の、御利生有りけるや、見えぬ眼も見え明きらかに、有難かりける新玉の、年立ち帰る如くにて、水も波らさぬ夫婦の命も助かりけるは、まことに目出どう候らいける。今日は嬉しや杖を納めて折しも朝の、日の目を拝んで、お礼申すや神や仏、よろず見せ給うはこれひとえに観世音、これひとえに観世音の、誓いの重きは岩を建て、水をたゝえて壺坂の庭のいさごも浄土成らん御しめし有難、かりける御法なり。

第二部

一、三曲 昭和松竹梅

大野恵造 作歌  
宮城道雄 作曲

これは宮城新曲ですが、歌詞は古雅の香り高い昔からの慶賀の三幅対、松竹梅を箏歌として作った大野恵造氏の作詩を箏曲化したものです。徳川時代の名曲松竹梅に対して、昭和の新装をこらした曲で、箏も一部二部とし、ことにその手事に新味を加えて、瑞気溢るる欣賀の曲としての装いで、新たな寿の美酒(うまさけ)をからませて喜びに酔う曲、宮城道雄師遷曆(昭和二十八年)の作品で、こよなき喜びを述べた曲です。

天地の 瑞気あつまる 大足日  
世を挙げて祝ぐ 慶福の日よ  
若枝の松は 千代ことほぎて  
和心日影に 緑をかかけ  
生命太しく 伸びたる竹は  
深くぞ備へて 根を張りしづか  
年経りし梅は 花咲き 諸人の  
胸にその香を吹き送りけり。

このあらたなる 寿の  
美酒こそは こゝにあり  
生日足日の 幸くみて  
俱によ 重ねむ これの盃  
慶祝に 同胞は酔ふ

の山へ、飛んで出たるは何者ぞ。頭にふつ、ふと二つ細うて、長うてりんとはねたを、ちやつと推した。謡へ兎じゃ。大名へ何を申す。して西の宮はまだか。太郎へもはやこの森の中でござりまする。大名へさらば参詣をいたそうぞ。太郎へハア。大名へまづ鯨口にとりつこう。じやがん。いかに申し上げ候。われ今年まで無妻なり。大名へ三郎殿の利益にて、定まる妻を授け給え。授け給えと、一心こめて伏し拝む。大名へヤイ太郎冠者、汝も拜め。太郎へ畏つてござる。じやがん。いかに木比須三郎殿へ申し候。へわれも定まる妻はなし。似合相応美しき、妻をお授けくんと、三拜九拝したりける。大名へヤイ太郎冠者、今宵は通夜しよう。汝もまどろめ。太郎へ畏つてござる。大名へあら尊や。へ内陣の内ぞ床しきわが妻を、千代と契らん手枕の、袖をおおうてまどろみしが、程もあらせず夢さめて。大名へヤイヤイ、お告げがあった。汝が妻になる者は、西の門の一の階にあらう程に、連れて帰れ、とお告げが。太郎へこれは如何な事、私がお告げもその通り。大名へ急いで参ろう参ろう。へ勇み悦ぶ足元に、落ちたる竿を取り上げて、大名へヤ、これは如何な事、妻ではのうて、竹の先に糸がついてある、これは何であらうぞ。太郎へ不思議なお告げでござりまする。大名へイヤこれは悟った。恵比須殿はふだん釣竿をはなさず、釣ばかりしてござるによつて、この針で妻を釣れということであろう。まず急いで釣りましょう。エイ。へ釣ろよ。神の教えの釣針を、おろし、みめよき妻を釣ろうよ。合へ針をおろせば、へ不思議やな、気高き女を釣りあげて、大名へアラありがたや、さてもよい妻がかかつてござる。嬉しや。太郎へ何がさてお喜びでござる。大名へこれ、そなたは定まる妻じやによつて、目をかけてやる程に、夫を大事にしましよぞ。や小野の小町か楊貴妃か、アラ美しい。太郎へイヤ申し、道々こつそり楽しもうと、背中へ入れてきたこの吸筒、お二人様の三々九度、これにてめでとう御祝言。大名へヤこれは一段の事じや。サアサア注げつげ。太郎へ心得てござる。大名へまず女子の方よりさしませい。女へ申しわが夫、必ず見捨てて下さるな。大名へなんの見すててよいものか。女へオオ嬉し。大名へ太郎冠者、祝して一つ謡うてくれ。太郎へ畏つて候。へ高砂や、この盃がへ二世の縁、神の御前で祝言は、三郎さまがお仲人、よしそれとても浮気心があるなら、ほんに罰が当るであるぞいな。必ず見捨てて下さるな。やいのと寄り添えば、へかたえに聞きいる太郎冠者、気をもみあせり。太郎へヤ申し、その釣

さあれなべて 度しきにぞ  
こころ在るは 佳し  
こころ在るは 佳し。

二、常磐津 釣 女

河竹黙阿弥作詞、六世岸沢古式部作曲。明治十六年十二月に発表されました。のち明治三十四年「戎詣恋釣針(えびすもうでこのつりばり)」という題で舞踊劇として上演されたから、とくに知られ、流行するようになりました。狂言の「釣針」の趣向をそのままかりたもので、おおらかさと滑稽さの対比が見事にあらわされております。太郎冠者が醜女を釣り上げるところが、とくに面白くなっております。

へそもこれは猿樂の、昔よりしてその技の、おかしといひし狂言師名に大蔵や驚流の、姿をうつす釣女。大名へかように候者は、この所々の大名でござる。ヤイヤイ太郎冠者あるか。太郎へハア、おん前に。大名へいたか。太郎へハア。大名へ汝も知る如く、この年まで定まる妻がない。うけたまわれば、西の宮の恵比須三郎殿は、福者と申すこと、これへ参り、妻を申しうけよう存ずる。汝、供をせ。太郎へまことに仰せの如くでござる。西の宮の、木びす三郎殿へ参るがようございましょう。私も定まる妻がございませぬ。ついでながら申しうけまじよう大名へさてさて、己れは卒爾な事をいうものじや。あびす三郎殿とこそいえ、きびす三郎と申す事があるものではない。太郎へハテ、糞にかいた折はあびす三郎と申し、木で作った折は、木びす三郎と申します。大名へなかりは物は物知りでありや。それがしは道不案内じやほどに名所旧跡を語りきかせよ。太郎へ畏まつてござる。大名へさらば急いで参ろう。サア。来て。して、向うに見える山は何山じや。太郎へハア、あれは山でござる。大名へこは夏山葉山じやが、何と申す。太郎へエエ何山は山でござる。オオそれ。へあんの山からこん

竿を私にお貸し下され、見事釣つて見せまじよう。大名へ早う釣れ。太郎へイヤ釣る段ではござらぬ。エイ。へ釣ろよ。釣るものは何々。鯛に鱈に恵方棚に撞き鐘、信田の森の、狐にあらぬ釣針を、さげおろして三十二相、揃うた十七八を、釣ろよ。おかつさんを釣ろよ。へ余念もなき鼻の下、オオ当るぞ。どっこいしめたと引き上ぐれば、かつぎ目深にかつぎし女。アラ尊や、かかつたわ。サアサアこちへござれ、嬉しや。へサアサアこれからは三々九度の盃じや。これへござれ。何も恥かしい事はない。そなたと夫婦になるならば、春は花見、夏は涼み、秋は月見の酒盛に、冬は雪見のちん。鴨、天にあらば比翼の鳥、地にまたあらば連理の枝、必ずしもじは交るまいな。悪女へ何の変つてよいものかいな。太郎へまず何はともあれ御面相を。へかつぎをとればこはいかに、河豚に等しき醜女ゆえ、太郎へヤア、和御寮は鬼か、ばけものか。のう消えてなくなれ。悪女へのうわが夫、今おつしやった楽しみは、嬉しゆうて、わたしは忘れはせぬわいなア。太郎へヤレ情ない、ゆるしてくれ。悪女へそりやつれないぞえ、太郎冠者どの。へコレこちを向かんせ。エエ何じやいなア。へ思えば深い恋の淵、沈むわが身を釣糸に、へ結んだ縁の西の宮、ひる子儲けて二世三世、へ変らぬ色は棹竹の、末葉染ゆる女夫仲、離ればせじと取りすが。大名へめでたいな。大名へおめでとうござりまする。へ笑い興せし能舞台、鏡の松の常磐津に、昔にかえる岸沢の、波の鼓のうちよりて、睦まじかりける次第なり。

三、河東 泰平住吉踊

元禄のころ、外記節(げきぶし)という音楽がありました。それを河東節で初代十寸見河東(ますみかとう)以来、預り浄瑠璃として今日まで語り伝えてきたもの、といわれております。摂州住吉明神で行われる住吉踊を主題としておりますので、たいへん古風な民謡、神事などが、巧みにとり入れられてお



へぐちな様だが合これま泣いてるわいな、端唄に免じて五郎助殿、了簡してと、ごろくへイエくわたしや打たれたからは、了簡ならぬとごろくへならずばうぬとごろくへ父さん待つてこよく合へこれしたりとごろくく、とめるはずみに雷婆、うんとはかりに倒るれば合へりやころりではあるまいか、医者よはり医と、たちさわげば合へ入れ歯の牙をのみこんで合胸につかえて苦しやとへいうにおかしく仲直り、夫婦喧嘩のあらましは、かくの通りと手拭で、汗を拭うていたてて夜這星合これはどうした文句やら、口説はささらざりつと、箒星にて掃き出し合さあ早くお床入り、これから我等も色廻り、西へ飛ぼうか合東へ飛ばか合どちへ行こうぞ思案橋合浮かれ浮かる足の下、合撞き出す鐘は浅草か、雲の上野の明け六つに、南無三夜明けにこのなりでは、

流星へハやおさらば、  
牽牛織女へさらば、

へ虚空はるかに失せにけり。

## 六、義太夫 道行旅路の嫁入 (八段目)

假名手本忠臣蔵

「假名手本忠臣蔵」については、とくに説明する必要はないでしょう。

加古川本蔵は、松の廊下で判官を抱きとめたので、大星由良之助との交際は絶えてしまいました。本蔵の娘の小浪は、大星力弥と許嫁の間でしたが、そのままになってしまいます。本蔵の後妻の戸無瀬は、義理ある娘の悲しさを見るに忍びず、好きな力弥に添わせてやろうと、京都山科の大星の閑居へと旅立ちます。

富士を背景にした東海道。旅姿の母と娘はおりから通りかかる嫁入りの行列をみて、世が世ならばとうらやみます。お軽勘平の道行ができてからは、歌舞伎ではあまり上演さ

れませんが、義太夫では背景も浄瑠璃も美しく、可憐な恋を描いた夢のような場面になっております。

へ浮世とは、誰がいい初めて、飛鳥川、ふちも知行も瀬とかわり、よるべも浪の下人に、結ぶ塩谷の誤りは、恋のかせ杭加古川の、娘小浪が許婚、結納も、とらずそのままにふり捨てられし物思い。母の思いは山科の舞の力弥を力にて住家へ押し嫁入も、世にありなしの義理遠慮腰元つれず乗物やめて、親子の二人連れ。都の空に、志す、雪の肌も、寒空は、寒紅梅の色添いで、手先覚えず凍え坂、薩埵峠に、さしかかり見返れば、富士の煙の、空に消え行方もしれぬ思いをば、晴らす嫁入の、門火ぞと、祝うて三保の松原につづく、並松街道を狭しと打つたる行列は、誰としらねど羨し。ア、世が世ならあの如く、一度の晴れと花かざり、伊達をするがの府中過ぎ、城下、過ぐれば気散じに、母の心もいそくと、二世の盃済んで後、闇の睦言私言親知らず子しらずと、蒿の細道、もつれ合い、男松の肌ひつたりと、締めて固めし新枕。女夫が仲の若みどり抱いて寝松の千代かけて、変わるまいぞの睦言は嬉しかろうとほのめけば、アノ母様の指合いを脇へこかして鞠子川、宇津の山辺の現にも、夢にも早う大井川、水の流れと人心、都の花にくらぶれば、日蔭の楓色づいてツイ秋が来て小男鹿のつまゆえならば、朝夕に辛気するものもなんのその。兎手柏のうら若き二人が仲にやや産んで、ねんくころんやねんねが守りはどこへ行た。どことは知れたその人に、逢うて恨みをなんとマア、どういうてよかろうと辛気島田の憂さ晴らし、わが身の上をかくとだに、人しらすかの橋越えて行けば吉田や赤坂の、招く女の声揃え。

へ縁を結ばば清水へ参らんせ、音羽の滝のざんぶりぞ毎日そういうて  
拜まんせそうじやないな、ししがんこうがかいれいにうきう、神  
樂太鼓にヨイコノエイ。こちの昼寝を覚まされた。都殿御に逢うて  
つらさが語りたやそうともく。もしも女夫とかか様、ならば伊勢  
さんの引合せ、

七里の渡帆を上げて艦拍子揃えてヤツツツシ。舵取る音は、鈴虫かイヤきりぎりす。鳴くや霜夜と詠みたるは、小夜更けてこそくれ迄と、限りある舟急がんと母が走れば、娘も走り空の、霧に笠覆い、舟路の友の、後や先庄野亀山せきとむる、伊勢と吾妻の別れ道、駅路の鈴の鈴鹿越え、間の土山、雨が降る水口の葉に、いいはやす、石部石場で大石や、小石

拾うてわが夫となでつ、さすりつ手に据えて、やがて大津や三井寺の、麓を越えて山科へ程なき、里へ、いそぎ行く。

## 七、長唄外記節石橋

文政三年(一八二〇)四月、四世杵屋三郎助(のち十世杵屋六左衛門)作曲。

元禄のころ、外記節(げぎぶし)の創立者薩摩外記直政が、謡曲の「石橋」の詞章に外記節で作曲してありましたが、すたれてしまっていました。それを長唄で、外記節の味をいかにして復活したものです。

歌詞は謡曲の文章をほとんどそのまま使っていますので、ふつうの長唄にくらべると、ややかたくなる感じがします。しかし、武張った中にうるおいもあり、曲としてよくできていますので、流行しております。

へ是は大江の定基出家し、寂照法師にて候、われ入唐渡天の望み候うて、波濤を越え、是ははや石橋にて候、向いは文珠の浄土清涼山にて候程に、このあたりに休らい、橋を渡らばやと思候。本調子へ松風の、花を薪に吹き添えて、雪をも運ぶ山路かな。合方へ樵歌牧笛の声、人間万事さまさまに、世を渡り行く業ながら、あまりに山を遠く来て、雲またあとを立ち隔て、入りつる方も白浪の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし、げにあやまって半日の客たりしも、今身の上知られつつ、妻木背負うて斧かたげ、岩根はげしき合そば伝い、小笹をわけて歩み来る。ワキへいがにそれなる山人、是は石橋にて候か。シテへさん候、是は石橋にて候よ、向いは文珠の浄土にて、清涼山とぞ申すなり、よくよく御拝み候え。ワキへわが身の上を仏感にまかせ、橋を渡らばやと思候。シテへしばらく候、そのかみなり名を得給いし高僧、貴僧ときこえし人も、ここに月日を送り給い、難行苦行捨身の行にてこそ、橋をも渡り給いしが、獅子は小虫を食まんとて、まず勢いをなすとこそきけ、わ

が法力のあればとて、たやすく思い渡らんこと、あら危うしの御事や。ワキへいわれをきけばありがたや、なおなおこの橋のいわれ、くわしく御物語り候えや。シテへ語つてきかせ申すべし。大薩摩へそれ天地開闢のこのかたへ雨露を降して国土を渡る、これすなわち天の浮橋ともいえり合その外国土世界において、橋の名所さまさまにして、水波の難をのがれては、万民富めり世を渡るも、すなわち橋の徳とかや、しかるにこの石橋は、巖岨々たる岩石に、己れと架かる橋なれば、石橋とこそ名付けたれ、げにこの橋のありさまは、その面わずかにして、尺よりは狭う、渡せる長さ三丈あまり、苔はなめりて、足もたまたまらず合谷のそくばく深きこと、数千丈とも覚えたり、はるかに峰を見上ぐれば合雲より落つる荒滝に合霧もうろうと暗うして、下は泥犁も白波の、音は嵐に響きあいて、虚空を渡るが如くなり。へ橋の景色を見渡せば、雲にそびゆる粧いは、たとわば夕陽の雨の後、虹をなせるその形、また弓を引ける如くにて合神変仏力にあらざしては、進んで人や渡るべき、向いは文珠の浄土にて、常に笙歌の花降りて、簫笛琴箏、夕日の雲に聞こゆべき、目前の奇特あらたなり。へしばらく待たせ給えや、影向の時節も今幾程によも過ぎし。狂い曲合方へ獅子団乱旋の舞樂のみぎん合獅子団乱旋の舞樂のみぎん、牡丹の英匂い満ちみち、大中利巾の獅子頭、打てや囃せや牡丹芳、牡丹芳、黄金のずいあらわれて、花にたわむれ枝にふしまろび、げにも上なき獅子王の勢い、靡かぬ草木もなき時なれや、万歳千秋と舞い納め、万歳千秋と舞い納め、獅子の座にこそ直りけれ。